学内広報

2017.9.25

no.1500

どこの鹿さん
だったっけ…

→P4

別館の竣工に続いて本館の改修工事も進行中

新図書館計画の現在

サマープログラムで夏の構内が国際的に

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

別館の竣工に続いて本館の改修工事も進行中

新図書館計画の現在

図書館長に聞きました

附属図書館長
久留島典子

自動化書庫の環境を計測中

別館はおかげさまで完成しました。私が初めてB1のライブラリープラザに入った際には、近未来感と同時に木の香り※1を感じました。噴水からの光※2が開放感をもたらすのは予想通りでしたが、メンテナンスの必要性も実感しました。今は本館にあった机を入れて静寂な学習空間としていますが、本来はアクティブラーニングの場。人数に応じ配置を調整できる机・椅子を検討中です。モニター前に椅子を並べたり、プラザ全体を使う催事もありえます。様々な使い方を募り、教育・研究に有意義なら積極的に実現したいと思います。

工事は46mも掘ってコンクリートの構造体をつくる大仕事※3。小さなダムと同程度の生コンを使い、100台以上ミキサー車が入る日もあり、順調に進むか不安でした。近隣に渋滞が起こる心配もありましたが、無事に終わって安心しました。コンクリートは乾きながら強度を高めます。湿度のほか、紙に影響するガス等の数値を計測し、自動化書庫に本を置ける時期を判断しますが、見極めには約1年が必要です。数値は落ち着いてきたので予定より大幅に遅れることはなさそうです。

本館の改修は耐震性強化が第一の目的です。耐震性は現在の基準から見れば低かった※4ので、末永く使うには耐震性を高める必要がありました。第二の目的は、インターネットやIT端末の普及、バリアフリー化といった現代的状況への対応です。席でPCを使うための電源増設など機能整備も行います。

改修で大きく変わるのは、4階と館東側です。開架図書と閲覧室があった4階はアジア研究図書館になります。各部局にある関連図書を集中させ、アジア研究の一大拠点を築きます。また2階東側には学術資産のデジタルアーカイブ化機能などを考えています。さらに5階にあった視聴覚センターの設備を移し、2階東側は紙以外の媒体を活用する空間となります。1階の洋雑誌閲覧室は創建時の姿に復元し、名前も「記念室」に戻します※5。通常は閲覧室として利用しますが、イベントも行いやすい仕様になる予定です※6。大階段付近は見た目を変えずに耐震性を強化します。外光が入らなかった3階ホールは、創建時のように上から光が入るようになります。柱は増えますが、今より明るくなるでしょう。大閲覧室の雰囲気もそのまま復元します。大机は補修し、機能を加えます。中2階の閲覧室の一部はセミナー室となる予定です。

開架図書はしばらく館西側に

改修中の課題となるのは利便性の維持ですが、開架図書のほとんどを館の西側に移し、ほぼ同じ場所で利用できる状態にできました。開架資料近くの座席は減りましたが、その分は安田講堂、山上会館、医学部1号館などで補えています。学内のご協力の賜物です。

予算措置、進捗によりますが、工事完了は2020年度の見込みです。完了の暁には、計画のテーマ「世界に開かれた知の集積、創造、発信を行う図書館」に即したイベントを実施する予定です。ACS※7にも考えてもらい新図書館を知ってもらう好機にしたいと思います。

前館長※8時代に動き出した計画の志を継ぎながら状況に応じて工夫するのは大変ですが、今後末永く使われることを思うと、重い役割を担う緊張と感慨深さを感じます。未来の図書館像を示す仕事ですから、什器一つとってもそう気軽には決められません※9。

別館完成まで至ったのは全学の協力があってこそ。本館の改修で不便をおかけしますが、図書館の利用が研究・教育の根本に関わることは深く自覚しています。できる限り不便を大きくせずに進める所存です。建物を新しくするだけでなく、知を次世代に継ぐ事業も始めています。建物に魂を入れる段でも全学の皆様に協力をお願いしたいと存じます。(談)

※1 ライブラリープラザの天井には、岐阜県産杉材による放射状ルーバーが設置されています。
※2 夏場は光が強いので天井にある電動スクリーンで調整しています。
※3 工事は「ニューマチックケーソン工法」という土木技術を使って行われました。地上でつくった建物を重さで沈めていくというもの。「土の固さにばらつきがあると水平に沈めにくいと聞き、工事期間は日々緊張していました」(久留島先生)。
※4 本館は関東大震災後にできたもので、耐震性がひどく低かったわけではありません。
※5 創建時の「記念室」から「貴賓室」、「自由閲覧室」、「洋雑誌閲覧室」と、部屋の名は変遷を重ねてきました。
※6 従来も洋雑誌閲覧室をイベントに使うことはありましたが、大机を片づけるなど、イベント仕様にする手間がなかなか大変だったそうです。
※7 アカデミック・コモンズ・サポーター。
※8 前館長は古田元夫先生。現在はベトナム・ハノイに開学した日越大学の学長を務められています。
※9「ライブラリープラザの中央部分にはちょうどよいソファを置きたいと思っていまして、どんなものにするか検討を重ねているところです」(久留島先生)。

本郷で「新図書館計画アカデミック・コモンズ」が進んでいること、先日別館ができたことはもちろんご存じでしょうが、本館の工事がどうなっているのか、今後どんな姿になるのかは、きちんと知らない人も多いのでは？そこでここでは、館長インタビュー、図書館活性化に燃える学生スタッフ（ACS）の座談会、現況写真の3方向から、図書館の現在を紹介します。

ACADEMIC COMMONS 新図書館

地下の別館と地上の本館を模式的に表したアカデミック・コモンズのロゴ。

学生に聞きました　アカデミック・コモンズ・サポーター（ACS）座談会

――ACSに参加したきっかけは？

木下■高校時代に図書委員で、図書室活性化に立ち上がった先生とともに活動したのが、楽しい思い出となりました。ポスターでACSを知り、久々に図書館のことを考えようかなと思って参加しました。

野村●私は図書館情報学の授業を取っていて、図書館に興味がありました。従来は利用する側でしたが、今度は運営する立場に回ってみたいと思ったんです。

木村▲私はジュニアTAとして駒場図書館などに関わり、こまとちゃんとのコラボマンガを描いたこともあり、図書館に親しみがあったので、その延長で入った感じです。

佐野◆私が入った理由は図書館が好きだから。あと、友達が欲しかったからです。

――人数と活動内容を教えてください。

野村●全体で14人でうち文系が10人です。2年も1人いますが3〜4年と大学院生が主ですね。頻度は定例会議が月に1回で、あとはプロジェクトに応じて活動します。

木村▲昨期の活動では、スタンプラリー、アーカイブ、ブクログ、演劇と4本柱がありました。スタンプラリーは、進学選択で本郷に来た学生が各図書館室に行くことが大切だと思って企画しました。35館中14館を対象に、9〜10月に取材し、11月にパンフを刷って12館に置き、443部配布しました。景品はブックカバーでしたが、結果、景品引き換え人数は想定以下の20〜30人でした。広報不足などのため回り方に誤解が生まれたようです。次のアーカイブは、企画だけで、最終的には実現しなかったものです。学内には膨大な情報がありますが、図書館の電子化コレクションなど、価値があるのに知られていないものも結構あります。そうした情報の一覧サイトを検討しました。

野村●ブクログでは、授業で使った本や参考図書の概要と感想を用意して紹介しています。いま10冊分が公開済で、第6期でも続けていくことになりそうです。

木下■演劇は、ライブラリープラザの紹介文に「知の円形劇場」とあったのを見て、閃いたんです。従来の図書館が確かな知の現場だとすると、ライブラリープラザは「熱い知」の現場。演劇は熱い知の一つだと考えました。実際に行ったのは戯曲の輪読。1時間程度で読めて東大受けしそうなものということで、安部公房の「友達」にしました。思うに、図書館は「みんなで読む場」です。誰かと本がつながる場ではなく、みんなが本を共有する場。本を通してつながり、本をハブに知を共有するモデルをイメージしています。

――ACSで活動してみてどうですか。

野村●メンバーと話すたびに新鮮な見方に触れられますね。様々な専門の人がいますから。教職員の話を聞けるのも新鮮です。どんな問題を抱えているかとか、学生との接点を大切にしているなんて話はACSでないと聞けなかったかも。

木村▲印象的だったのは、何かやる際に様々な部署と折衝すること。記事を書くのでも、協力をお願いし、取材し、確認を繰り返します。ジュニアTAでは見えなかったけどACSではそれを痛感しました。

木下■私は、図書館についてもっと大学全体でどういう機能が必要か、どういう役割を担うべきか、考えてほしいと感じました。研究や学習のスタイルが日々変化している中で、図書館が大学の中で担うべき役割は、今と10年前、10年後では違うはず。常にそこを考えるべきで、そのためにACSは働けると思うのです。

――では、東大の図書館について思っていることを聞かせてください。

野村●地域とのつながりが足りない気がします。本郷は書店や出版社も多いし、ともに組んでやれたらいいと思います。柏図書館は地域活動が盛んと聞きますが。

木下■柏は新しいからこそ地域になじもうとしているんじゃないかな。本郷だと、東大のほうが古くからあるから……。

佐野◆私は、今までどおり自習もできる

スペースがあってほしいです。変わるべき面がある一方、変わらないところもあるべき。書庫もあのまま残ってほしいな。

木下■みんなで紙の本を読む文化を残すのは図書館の使命だと思う。でも今は電子書籍の問題が喫緊です。研究室にいながら必要な本が電子で読めるなら、図書館に行く必要はありません。図書館に日々新しい何かがあり、人がいつも集まる場なら別。その起点としてライブラリープラザがあると解釈しています。大切なものを守るためにこそ新しい場が必要。「みんなで読む場」と掲げることで、電子化だけでない方向に行けると思います。

野村●図書館は、情報だけじゃなく、人がそこに集まるという点で、電子書籍にない価値を持っていると思います。みんなで読むだけでなく、みんなで話し合う。知をためるだけでなく、つくりだす場所に、機能の重点を変えるべきだと思います。

木下■それこそ熱い知、ですね。

佐野◆「みんなで読む場」は楽しそう。先生から、大学からの勉強は一人ではできないと助言されました。みんなで意見を出し合うのは大学らしくていいと思う。

――真剣さがよく伝わったところで、軽くお気に入りスポットをお願いします。

佐野◆雑誌が多い洋雑誌閲覧室です。「南葵文庫」の額もかっこいいですしね。

木村▲駒場のアドミニ棟の隣にある保存庫が好きでした。一度行く機会があり、本の匂いが濃くてよかった。本郷だと、総合図書館の書庫は海の中を泳いでいるみたいで好きです。図書館室として一番好きなのは明治新聞雑誌文庫ですが、今後改修で休館になるのが心配です。

野村●改修前の4階の端にあったキャレルです。一人用の閲覧机と椅子のセット。国文や図書館情報学の本があり、借り出さずにそこで調べられるのが好きでした。

木下■本来の正面玄関近くにあった一人用の椅子が好きでした。座り心地がよくて、ふらっと座って本を読めた。しばらく復帰しないみたいなので残念です。

――出てきますね。では最後に今後ACSでやりたいことを教えてください。

木下■「みんなで読む場」として、熱い知を感じられるライブ性のあるイベントを引き続き開催したいです。学内の様々な団体が出している冊子のアーカイブも考えたい。

木村▲確かに、書籍流通に乗らない冊子は多いからきちんと集めておくべきです。

佐野◆私は前に新聞で読んだ「人の図書館」がやりたいです。本を借りるように、ふだん交流がない人と話す場を設けるんです。映像上映会もやりたい。いろいろな言語を学ぶ学生や先生に頼んで、珍しい国の絵本を紹介するのも楽しそうです。

野村●図書館のPVもつくりたい。あと、推薦本を表紙が見えない形にして、推薦文だけで選んでもらうことをやってみたい。「文庫本X」みたいなもの。返却時に読んだ人が感想をつけるとなおいい。

木村▲図書館という枠にとらわれず、学内施設との連携も進めたいです。特に文書館は学生にあまり知られてないような気がします。

佐野◆このまえ、総合図書館にはほしい本がないと言われてショックでした。

木下■あ、OPACで調べると本郷にはないけど駒場にあるものがけっこうあるよ。

木村▲駒場は新刊を含めて蔵書が幅広いよね。1箇所に入ると他には同じ本を入れにくい、ってことかもしれないけど。

野村●本郷のほうが専門的なのは当然。さわりを知りたいなら駒場のほうが向いているはずで…（以下、ACS会議に突入）。

写真で見る総合図書館の工事と現在

1,2 洋雑誌閲覧室の壁に掛かる鹿の首の剥製は、1913年に英国王ジョージ5世から寄贈され、関東大震災時に火災の中から運び出されて難を逃れたもの。今回クリーニングと修復を受け、本来の姿に近い赤茶色に戻りました。3,4 徳川慶喜の筆による「南葵文庫」の額や、インドの詩人・思想家タゴールの肖像も工事中は取り外されています。5 3階大閲覧室の大机は大階段にレールを敷設して搬出。6 館長室は仮設のコピーセンターとして使われています。7,8 事務用の会議室だった部屋は書架・閲覧室として利用されています。9 3階ホールの現在。10 3階大閲覧室には、工事中に発生する瓦礫を落とすための穴が空いています。11 アジア研究図書館となる4階閲覧室。12 3階から見た大階段の現在。両側の大理石が板で保護されています。

参加者コメントで見るサマープログラムの実際

夏のキャンパスは国際色ましまし!

Ichi-go ichi-e. This is what UTRIP is about.

UTRIP gave me the opportunity to improve myself in every aspect and reinforced my dream of being part of the scientific community.

This program made this summer a memorable one for me. I got to do some interesting research while getting to experience the intriguing Japanese culture with new friends.

Not only did I get to do cutting edge research at a top university, I also got a firsthand look at Japanese culture and language in a way that I otherwise would never have been able to. Truly an unforgettable experience.

I arrived in Tokyo expecting a research internship, but UTRIP gave me so much more than that, I left with new friends, peers, incredible memories and more motivation than ever.

UTRIP is essentially unique: i.e., the opportunity to be immersed in an environment of mutual respect and rigorous inquiry – set against the fantastic neon circus of Tokyo. Even if only in a small way, I felt UTRIP viewed me as important – there is no better reason to get up in the morning.

A summer I will always remember as the time of conducting my first research, while discovering a fascinating culture and the exotic beauty of this country

UTRIP has given me the opportunity to be part of a world's leading scientific community and at the same time experience the liveliness and vibrancy of Tokyo with friends from all over the globe.

This was a summer full of highest class reaseach as well as getting to know the fascinating Japanese culture and people. And many spontaneous karaoke nights of course! Thank you for making this vacation a once-in-a-lifetime experience!

This summer, I not only had a great experience of research in UTokyo but also met lots of UTRIPers from all over the world.

Note that side effects might (and probably will) include:
- Getting to know awesome people from Japan and all over the world.
- Witnessing Japan and Japanese culture first hand.
- Having loads of fun.
Be advised.

UTRIP rewards me the insight of science in one of the best research universities, the charisma of traditions and cultures, and the dynamics of diversity in the program attenders and lab members.

毎年盛夏の頃には、夏期休暇で授業がないために人通りが全体的に減る一方、キャンパスは国際的に色づきます。それは、様々な部局が実施するサマープログラムのために世界中から学生が集まってきてくれるから。ここでは一例として、理学系研究科が行っているリサーチ・インターンシップ・プログラム「UTRIP」に参加した皆さんに、プログラムとこの夏の経験について一言ずつコメントをもらいました。2010年に始まったUTRIPは自然科学を専攻する海外大学の学部生が対象。厳しい審査を勝ち抜いた全20人の学生が16の国・地域から前期と後期の日程で来日し、各6週間の活動を行いました。物理学、天文学、化学、地球惑星科学、生物科学の5専攻に分かれて研究を行うとともに、着物や茶の湯をはじめとする日本文化の体験や、キャンパスツアー、日光植物園見学などにも参加し、日本人学生との交流も満喫。その充実ぶりはコメントと写真から伝わります。数年後、今度は東大の大学院生としてキャンパスを歩く元「UTRIPers」に出会えるかも!?

その他の主な国際短期プログラム

（今年度／9月12日現在本部国際交流課登録分）

The University of Tokyo Summer Internship Program in Kashiwa – UTSIP Kashiwa ／ IB UTokyo-ZJU インターンシッププログラム	新領域創成科学研究科
The University of Tokyo Forests Field Education Program ／東京大学演習林ー国立台湾大学実験林を利用した相互補完的な森林・林業・林産教育	農学生命科学研究科
Students and Researchers Exchange Program in Sciences (STEPS) for UTokyo-bound Students ／ ERI Summer Internship Program under JST Sakura Program ／ UCEAP Science Internship Program	理学系研究科
India-Japan Education Program (IJEP) Internship Program 2017 ／ Summer Program 2017, School of Engineering, UTokyo ／エネルギーシステムと都市のレジリエンス工学日土協働教育プログラム	工学系研究科
DMG 森精機 - 東京大学 IIT インターン支援プログラム 2017 ／ UTokyo Amgen Scholars Program 2017 ／ソウル大学・東京大学合同サマープログラム（東京ラウンド）	国際本部
最先端情報通信技術における日印トップレベル大学研究交流プログラム	情報理工学系研究科
東大・日越大学短期プログラム	IR3S ※
The University of Tokyo Global Japan Studies Summer Program 2017: AN INQUIRY INTO JAPAN'S POSTWAR	東洋文化研究所

※サステイナビリティ学連携研究機構

教養教育の現場から

リベラル・アーツの風

第23回

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

大人数の授業こそ「Think-Pair-Share」で活性化を

／初年次ゼミナール理科・共通授業へのアクティブラーニング導入

お話／教養教育高度化機構
アクティブラーニング部門特任助教 吉田 塁

――工学部出身だそうですが、どんな経緯で教育の方面に進んだんですか。

「学部では計算機科学、大学院では生体医工学の研究をしており、博士課程2年時に受講した東京大学フューチャーファカルティプログラム（FFP）がきっかけでした。FFPは教え方を学ぶプログラムで、アクティブラーニング（AL）が効果的に組み込まれていて、非常に感動しました。また、高等教育が変わるという機運も感じ、是非教育に貢献したいと強く思いました。そこで、FFP担当の栗田佳代子先生に直談判して、高等教育の研究をさせてもらい、大学院修了後に大学総合教育研究センター特任研究員を経て、2015年10月に現職に着任しました」

――FFPでALに覚醒ですね。ではそのFFP仕込みの取組みをご紹介ください。

大規模教室での双方向型授業

「大規模教室でどうALを導入するかが私のテーマの一つです。最近手応えを感じたのは、平成27年度から始まった初年次ゼミナール理科との連携です。理科生全員（約1800人）が対象で、1週目はガイダンス、2週目は科学研究の基礎を学ぶ共通授業、3週目以降は各担当教員のクラスにわかれます。その共通授業の開発に携わり、ALを効果的に組み込めるよう設計しました。共通授業は複数の教員が実施することになっており、ALは設計だけでなく実施も重要であることから、私も含めた担当教員5人で2日かけてリハーサルも行いました」

「共通授業では、大学とは何か、研究とは何か、研究プロセス、文献の検索方法、研究倫理について学びます。研究プロセスを知ってもらう中で、研究計画を考えるというお題を設定し、Think-Pair-Shareの手法を活用しました。まず自分で考え、次に周囲の2～3人と議論し、最後に議論内容を全体に発表するというものです。教員が一方的に講義するのではなく、学生全員が能動的に考える形式です。結果、共通授業は高い評価を得ることができました」

――とはいえ、大きな教室の後ろの方だとやはり居眠りしちゃいますよね。

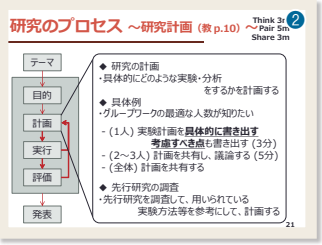
学力の高い学生にもよい効果が

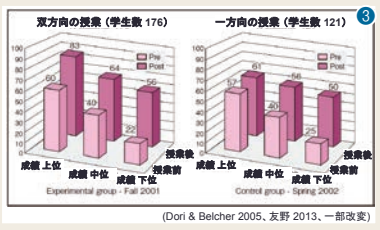
「長机の端からペアを作り、余った学生は右のペアに入る、などとグループが機械的に作られるよう工夫すれば、大人数の共通授業でも95%ほどの学生はワークに取り組んでいました。Scienceに載っている研究でも、ALをうまく導入すると、授業を聞く学生の割合が45%から85%に向上し、授業の出席率は約1.5倍になると示されています。また、ALは学力の高い学生にも効果をもたらします。ALが効くのは少人数の場だけ、有効なのは学力が低い学生だけと思われやすいですが、そうではないのです（→❸）」

――今後やりたいことはありますか。

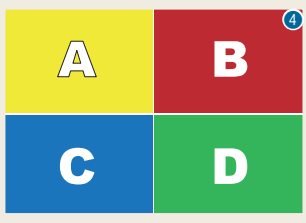
「オンラインの学びにもALを導入したいです。現在、自分のバックグラウンドを活かして、オンラインでもグループワークができるシステム LearnWiz を開発、評価しています。うまくいけば、オンラインの学びを大きく変えられます」

――一人より複数の方が力を発揮できる。研究でも当てはまりそうですね。





(Dori & Belcher 2005、友野 2013、一部改変)



❶初年次ゼミナール理科の担当教員・TA向けワークショップも実施中。❷❸共通授業で使ったスライド資料より。❹学生が選択肢を提示するためのカード。ICT機器がない大教室でも手軽にALを導入できます。❺吉田先生が編集に携わった書籍『博士になったらどう生きる？』（勉誠出版）。FFP修了生17名が執筆に関与。

教養教育高度化機構（内線：44247）

総長室だより

第2回

～思いを伝える生声コラム～

東京大学第30代総長　**五神 真**

教職員の雇用環境改善に向けて

前号では、未来への投資として若手研究者の雇用安定化が本学にとって最優先事項であることを述べました。若手研究者が大学で活躍するためには、彼らをサポートする事務職員の存在は不可欠です。そのために職員の雇用環境の改善にも取り組んでいるところです。

法人化を契機として、大学の職員の方々の業務も多様化、高度化、専門化が進んでいます。その中で、短時間勤務の方も含め、雇用年限が限られた有期の雇用契約で働いていただいている職員が急激に増えています。私は、ポテンシャルの高い職員が期間満了で退職していくのは惜しいと感じ、総長に就任する前から学内外に働きかけをしてきました。

例えば、理系で博士号取得後に2年ないし3年と期間を区切って働くポスドク研究員は、プロの研究者人生のスタートとして、視野を広げ、新たな学問を生みだす構想を練る期間として大変重要です。しかし、現在の有期雇用の多くは、その雇用財源に期限があったり、使途に制約があったりするなどの理由により、長期の雇用契約が結べず、有期雇用となっています。その中での規模拡大は問題です。人事の流動性は本人にとっても組織にとっても活力の源泉です。しかし、それと雇用の不安定性は別問題です。

このたびの指定国立大学認定でも、本学全ての教職員が安心してより高いパフォーマンスを発揮していただくために、有期、無期を問わず教職員の働き方や雇用環境を改善することを最重要と捉え、仕組みの点検と改革を進めることを明言しました。

前号でも述べたとおり、安定化した資源を有効に活用して「人」に集中投資していきます。そのターゲットは若手研究者だけでなく、彼／彼女らを支える職員でもあります。職員と教員や研究者の相互信頼のもとで、互いの役割分担と責任や権限が明確化され、職員はプロフェッショナルとして主体的に業務をこなすという姿です。その任務を担う候補者は有期で雇用されている職員の中にもたくさんいます。そこで、多様な雇用制度（「職域限定職員制度」や有期雇用制度の弾力化など）を来年4月に導入したいと考えたのです。しかし、先月、本学が有期雇用職員を5年で雇い止めにするとの報道がなされたので、真意をお伝えせねばと思ったのです。

私は、引き続き、教職員のみなさんが安心して存分に活躍できる環境の整備に努めます。本学のミッションをしっかり果たせるような体制を、教職員一丸となって創っていきましょう。（つづく）

シリーズ　第6回

連携研究機構

数理・情報教育研究センター（MIセンター）の巻

話／連携機構長
駒木文保先生

いま必要な数理・情報教育を推進

――MIセンターのミッションを教えてください。

「数理的手法、データサイエンス、情報技術の総合的な教育基盤を整備することにより、課題抽出、問題解決、価値創造を社会で担う人材を育成します。現代社会では、ビッグデータから適切に情報を抽出し、課題を発見・解決することが文理問わず重要で、それには数理と情報のスキルが必須です。東大の理工系での数学教育の水準は伝統的に高いものがありますが、さらに現代では、従来のカリキュラムでは十分カバーされていない新しい数理の必要性も高まっています。全学的な教育の底上げを図るため、カリキュラムを検討し教材の開発を行い、数理・情報教育を推進します」

――現代社会ではどんな数学が必要なのでしょうか。

「線形代数と基礎的な解析学が必須なのはいうまでもありません。さらに，確率，統計，最適化，アルゴリズムの基礎も不可欠です。現象やデータをモデリングして解析するのに必要となる数学です。数理・情報の比較的新しい分野の教育はまだ十分に体系化されていません。特に、数理・情報をデータサイエンスに活かして活躍できる人材の育成は欧米や中国と比べても十分ではないのが現状です」

「MIセンターには、数理情報部門、数学基礎教育部門、基盤情報部門、用展開部門の４部門があり、現在21人の教員が所属しています。兼務が主ですが、秋から専任教員を増やし今年度中に10人程度になる予定です」

――学外との連携も進んでいるそうですね。

「東大を幹事校として、北大、滋賀大、京大、阪大、九大と6大学コンソーシアムを設立しました。作成したカリキュラムや教材を全国の大学に展開することで日本の数理・データサイエンス教育の底上げを図ります。また、社会との協働のため、産業界コンソーシアムを10月に立ち上げます。社会人向けの数理・データサイエンス教育の機会を設けたり、産業界から生きたビッグデータを提供してもらい教育に役立てる、といった展開を考えています」

「8月の設立記念シンポジウムでは、産業界から100人以上の方に来場いただき、数理とデータサイエンスを使いこなす人材が幅広く求められていることを実感しました。現代の企業ではエビデンス・ベーストな意志決定が必要で、経営者にもデータサイエンスの素養が必須です。数学は本当に役に立ちます。たとえばスマホは数理・情報の塊といえます。便利な技術の裏には様々な数理・情報の知見があることを頭の片隅に置きながら、MIセンターをご支援いただければ幸いです」

www.mi.u-tokyo.ac.jp

あちこちそちこち 東京大学

第20回

本郷・駒場・柏以外の本学を現場の教職員が紹介

農学生命科学研究科附属
生態調和農学機構の巻
准教授
米川智司

都内で農を体感する新生「田無農場」

北側キャンパス。手前が整備中の調製施設群と格納庫棟。

農学生命科学研究科附属生態調和農学機構は、複数の組織の改組と機能融合によって2010年に設立された附属施設ですが、キャンパスの起源に当たる駒場の農学校に農場ができてから、来年1月に140周年を迎えます。また、東大前駅から約1時間の西武新宿線田無駅近くの現キャンパスに移転してからも82年が経ち、土壌など良質な栽培環境の下、多様な農学分野の教育研究が展開されています。

訪れた大方の第一印象は、都内とは思えない広い田園風景でしょう。本郷キャンパスの半分、弥生キャンパスの倍ですが、駒場農場のたった3割、改組前の5割強に集約される予定で、現在キャンパス整備が進んでいます。

農学部学生の約半数が実習し、100名以上の教員や大学院生が研究に活用しており、運営経費にもなっている実習後の農産物の販売は、新鮮さや美味で即日完売もしばしばです。他に、中等教育学校の生徒も農作業体験に来ていますが、特徴的なのは、地域社会との接点が多いことです。農学校以来の農機具などを展示している農場博物館の運営をはじめ、それぞれ千人以上が訪ずれる、観桜会や検見川から移転してきた花ハス見本園での観蓮会、ひまわり迷路などの開催では、市民ボランティアの皆さんの支援が頼りです。加えて、公開セミナーや農業体験講座を通して、農学の知的・物的資源の発信や理解の共有にも注力しています。

ホームカミングデイ行事も毎年行っていますので、体感しに是非いらして下さい。

1.学生実習でのイネの生育調査。2.乳牛舎を改装した農場博物館。3.東大の名称で品種登録された植物第一号の「緑地美人」。4.ひまわり迷路。

www.isas.a.u-tokyo.ac.jp/

いちょうの部屋

第2回

学内マスコット放談

今回のゲスト
ごろくろーさん
Gorokuro
柏キャンパス一般公開公認マスコット

2012年、非公認マスコットとしてデビュー。その後の涙ぐましい努力が評価され、2014年に晴れて公認に。

いちょう◉こんにちは。キミはカッパなのかな？
ごろくろー◆知の世界から生まれた妖怪なんだ。僕の姿は好奇心旺盛でない人には見えないから、僕が見えてるってことは、キミは知りたがりやだね。
い◉ふーん。そっち系かぁ。おうちはどこ？ 虚空？
ご◆住所は五六郎池。立派な柏市民さ。キャンパスから溢れる知的なメロディーと敷地内にいる保育園児の天使の声が心を和ませてくれるよ。住み心地は最高！
い◉プロフィールを見たけど、いま5歳児？
ご◆一般公開の非公認マスコットキャラクターとしてデビューしたのが2012年で、本当の年齢は……内緒。
い◉ふーん。好きなものは何？ キュウリ？ 尻子玉？
ご◆柏キャンパスから溢れ出る知的好奇心が大好物さ。
い◉頭から水がこぼれているね。水は枯渇しない？
ご◆頭のお皿は知識の泉。柏キャンパスにいるといろんな発見があって、水は毎日溢れっぱなしだよ。
い◉なるほどですね。チーバ君が好敵手だと聞いたよ。
ご◆昔はね。今は柏キャンパス一般公開を盛り上げるためにともに努力する仲間であり、ベストフレンドさ。
い◉人間に変身できるというのは都市伝説？

ご◆10月27～28日の一般公開期間中は成人男性風の姿で構内を練り歩いているよ。ここだけの話、人間のガールフレンドも……!?
い◉ナヌ？ 妬ましいね。友達はいる？ 鯉・鴨ぐらい？
ご◆もちろんたくさんいるよ。今は宇宙に興味があるから、宇宙線研の梶田先生やKavli IPMUの村山先生とも友達になっていろいろと教えてもらいたいな。
い◉ははあ、ドリーミーなタイプのようだね。現実に戻って、一般公開ではどんな仕事をしているの？
ご◆ポスターやパンフで宣伝活動に大忙しさ。一般公開期間中は講演会の案内や来場者のお迎え等をする予定。今年は生産技術研究所附属千葉実験所が新たに加わり、更にパワーアップした一般公開になるよ。実際に走っていた地下鉄の車両、大型水槽や自動車シミュレーターなど、僕も今から大興奮でお皿の水が溢れちゃう！ しかも、「シャープナー付き色鉛筆」や「デコレーションテープ」を総合案内で配布予定だよ。頭を好奇心で一杯にして遊びに来てね。

い◉OK牧場！ 安田講堂裏からシャトルバスで行くよ。

www.kashiwa.u-tokyo.ac.jp/openhouse/

※登場したいマスコットさんがいたら広報課まで一報ください！（いちょう）

インタープリターズ・バイブル

第122回

総合文化研究科教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門
藤垣裕子

責任ある研究とイノベーション

欧州では現在、2020年にむけた科学技術政策（Horizon2020）のなかでRRI（Responsible Research and Innovation）という概念が鍵となっている。責任ある研究とイノベーションといえば、日本ではすぐに「研究不正をしないこと」と結びつけて論じられてしまう傾向があるが、RRIは、決して研究不正にとどまるものではない。研究開発が社会からの問いかけに応答可能であること、研究およびイノベーションプロセスで社会のアクター（研究者、市民、政策決定者、産業界、NPOなど）が協働することを指す。

RRIのエッセンスには、open-up questions（議論をたくさんの利害関係者に対して開く）、mutual discussion（相互議論を展開する）、new institutionalization（議論をもとに新しい制度化を考える）がある。たとえば、東日本大震災そして福島の原発事故分析をすると、日本の技術者は閉じられた技術者共同体の中で意思決定をしてきており（例：安全性基準など）、地元住民に開かれたものにはなっていないことが示唆される。 それを開くのがopen-up questionsに相当する。また、その開かれた議論の場で技術者から住民へ一方的に基準が伝達されるのではなく、互いに異なる重要と思われる論点について相互の討論をおこなう、あるいは福島の経験をもとに各国が学びあうというのがmutual discussionである。そして、それらの原発ガバナンスに関する議論をもとに、現在の規制局の在り方を作り変えていくことが、new institutionalizationに相当する。

日本人は残念ながら、「組織や規則は自ら作るものである」という感覚が弱い傾向がある。組織や規則はおかみがつくって「それに従うもの」という感覚が強いためでもある。それゆえ、規則や組織を常によいものに変えていこうとする意識や、制度は自ら選択し改変すべきものという感覚が弱いのである。この傾向が、上記RRIのエッセンスのうちの3つめ、New Institutionalizationの感覚の欠如となって顕われる。

こういった研究者と市民、政策決定者、産業界などが協働する場面において、東大憲章が掲げる市民的エリートは活躍することだろう。本学の卒業生が日本のRRIをリードする土壌をつくることを願ってやまない。

科学技術インタープリター養成プログラム
science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

救援・復興支援室より

第67回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動（8〜9月）

8月	福島県大熊町学習支援ボランティア
9月	東日本大震災被災地スタディーツアー、岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア

ザシキワラシの日常 ㊶

本部企画課係長（遠野分室勤務）
文：佐藤克憲

No.1484（昨年7月発行）の本コラムにおいて、東日本大震災時に全壊した遠野市役所（中央館）を、JR遠野駅近くのショッピングセンターそばに再建する工事が行われていることを紹介しましたが、本年7月末に建設工事が完了し、同9月4日から市役所本庁舎として業務が開始されました。業務開始に先立ち、同8月19日及び20日に市民向け内覧会が開催され、私も足を運んできました。

設計コンセプトは、1.中心市街地活性化の核となる庁舎、2.市民の利便性の向上を目指した庁舎、3.市民に親しまれ、開かれた庁舎、4.環境にやさしく防災機能を備えた庁舎、の4つで、外観は正面玄関を囲うように設置された、瓦屋根＆伝統木組の建築物が目を引きます。1階は市役所に用事が無くても利用できる市民の交流スペースとして多目的市民ホールが配置され、2階は震災の影響等により市内数箇所に分散していた部署が集約されており、ショッピングセンター（一部の部署が震災後の早い時期に同所へ移転している）と渡り廊下で接続されています。3階は市議会議場や多目的大会議室などが配置され、後者には市の防災センターと連動した災害映像表示システムが整備されているそうです。また、利用者の安全に配慮したものとして敷地内の歩道の雪を溶かすロードヒーティングや、環境に配慮したものとして屋上に太陽光パネル、地下には市内の森林資源を活用する木質バイオマスボイラーが導入されています。

遠野産材を建材にもエネルギーにもふんだんに利用し、災害映像表示システムの整備等遠野らしさが存分に盛り込まれた新庁舎。この場所に再建した一番の目的と思われる「中心市街地活性化の核」として、いやがうえにも期待の高まる施設でした。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス！」。

（左）新庁舎（左側正面入口を囲むように瓦屋根＆伝統木組の建築）。（右）1階多目的市民ホール（遠野産材をふんだんに使用）。

www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html

トピックス　全学ホームページの「トピックス」に掲載された情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
8月24日	国際本部	清華大学学長一行が来訪しました	7月28日
8月30日	国際本部	夏季短期留学プログラム（サマープログラム）の開催報告	8月2日
8月31日	教育学研究科・教育学部	教員志望学生の交流会 2017 開催報告	8月23日
8月31日	大学総合教育研究センター	東京大学フューチャーファカルティプログラム　第 9 期 履修証授与式	8月24日
9月6日	総合文化研究科・教養学部	スポーツ先端科学研究拠点・立命館大学総合科学技術研究機構スポーツ健康科学研究センター　連携協定締結	8月25日
9月13日	広報室	広報誌「淡青」35 号を刊行しました	9月8日

CLOSE UP

夏季短期留学プログラム（サマープログラム）の開催報告　（国際本部）

最終報告会を終えて（香港大学・東京大学合同サマープログラム）。

地下鉄MRT建設現場の見学風景（インドネシア大学サマープログラム）。

国際本部では、協定大学等と連携し、夏休み期間中に5つの短期留学プログラムを開催し、学生に様々な国際体験の場を提供しています。

8月2～11日には、香港大学において、香港大学・東京大学合同サマープログラムを実施しました。今年は本学から17名、香港大学から8名の学生が参加し、本学東洋文化研究所の園田茂人教授及び香港大学の中野嘉子准教授の指導のもと、「Japan in Hong Kong: Challenges for the Future」というテーマで、講義や香港の日本企業への訪問などを実施。香港で活躍するビジネスマンから話をうかがい、学生たちは大いに刺激を受けました。その後、両大学の学生混成によるグループごとに、テーマを決めて調査を実施。最終日には企業関係者などを招待し、グループごとに10日間の成果を発表しました。

このような合同プログラムは、ソウル大学及び北京大学とも開催しています。講義とフィールドトリップを通じて見識を広げつつ、互いの国の政治、経済、文化、社会などを理解し、双方の学生が協働し自主的にテーマを見つけ発表することで、絆を深め、グローバル社会でどのように生きるかを考えさせるプログラムです。

その他にも、英語学習に加え文理に分かれたトピックの講義を受講するシェフィールド大学サマープログラム、英語による講義のほか他国学生とのディスカッションや共同作業を通じた交流や文化を学ぶフィールドワークを行うインドネシア大学サマープログラムを開催。語学だけにとどまらない多様な体験を提供しています。

CLOSE UP

教員志望学生の交流会2017 開催報告　（教育学研究科）

進行役の藤江康彦教育学研究科准教授。http://www.p.u-tokyo.ac.jp/ut-knet/news/20170823001/

8月23日に、教員を志望する本学学生と本学OB/OGで現職教員の方による交流会「教員志望学生の交流会2017」が開催されました。今回は二回目の開催となります。当日は、在籍生22名、卒業・修了生17名にご参加いただき、盛況となりました。教科別にグループに分かれ、事前に学生から寄せられた質問について話し合ったり、現職教員の経験談、採用にまつわるテクニックを伺ったりしました。懇談は途中席替えをしながら約1時間半行われ、最後に各テーブルの現役教員からコメントをいただきました。

参加した先生方からは、「自分が学生の時にはこのような良い機会は無かった」「直接会って話し合うことの大切さを改めて感じた」「自身が教師になった時の気持ちが思い起こされ刺激的であった」といったコメントが、在籍生からは「教職に就きたいという意志が一層固まった」「専門から普段の生活までお話いただき良かった」といったコメントがありました。交流会自体については「教員同士、学生同士の交流の時間があると良い」「他教科の先生方のお話ももっと伺いたい」等のご意見も頂戴しました。

CLOSE UP

広報誌「淡青」35号を発行（広報室）

広報室が丹精こめて年に2回発行している広報誌「淡青」の最新号ができあがりました。

今号の特集は、ローカルな視点で見たUTokyoの研究・教育・社会連携活動集「地域と東大。」です。東大の活動の現場は、もちろん本郷・駒場・柏だけではありません。20都道県には東大の施設があり、教職員が日々研究・教育に励んでいます。28都道府県では卒業生が市長として地方自治を牽引しています。そして、地域に入り込んで奔走する学生もたくさんいます。本特集では、日本各地で現場主義を体現する淡青色の人と取組みを誌面の許す限り紹介。映画「ローグ・ワン」のチアルート風に言えば、「東大は地域と共にあり、地域は東大と共にある」です。

巻頭には、現総長の五神真先生と24代総長の有馬朗人先生のビッグ対談も掲載。ぜひご一読を！

→表紙は田無の農場博物館です。

CLOSE UP 立命館大学とスポーツ研究の分野で連携協定を締結 （総合文化研究科）

石井拠点長と伊坂副センター長。

東京大学スポーツ先端科学研究拠点と立命館大学総合科学技術研究機構スポーツ健康科学研究センターは、スポーツ医学・科学および健康科学研究の発展、研究成果活用による健康増進やスポーツ文化の発展に寄与することを目的とした連携協定を締結いたしました。今回の協定締結により、人的知的資源の交流と物的資源の活用を図り、両大学による分野横断型の研究を推進するとともに、これまで専門的知識であったスポーツ健康科学に関する研究成果を一般の人々の生活にも反映させることで、健康長寿社会の実現に貢献する所存です。

締結式では石井直方拠点長より、スポーツ先端科学研究拠点の概要および本協定の主旨が説明された後、立命館大学総合科学技術研究機構スポーツ健康科学研究センターの伊坂忠夫副センター長より挨拶がなされ、協定書への署名が行われました。

CLOSE UP 東大FFPの第9期履修証授与式を開催 （大学総合教育研究センター）

履修証を授与される修了者。

8月24日、福武ホールラーニングスタジオにおいて、東京大学フューチャーファカルティプログラム（東大FFP）の第9期修了者に対し、履修証授与式が行われました。48名が修了し、本学大学総合教育研究センターの須藤修センター長より祝辞をいただき、履修証が授与されました。本プログラムは、大学院生・ポストドクター・若手教職員を対象として、シラバスの作成や模擬授業の実施等を通した教育力の向上を目的とするものです。これまでに全ての研究科から、合計431名の修了者を輩出しています。2017年10月には、第10期が開講される予定です。エントリーはhttp://www.utokyofd.com/ffp/tdhe/attend.htmlで受け付けております。

「学内広報」発行号数が通巻1500号に到達！

1969年に「資料」(❶）として生まれ、38号（❷）から「学内広報」の名になった本誌は、今号で1500号を迎えました。現在は月刊ですが、昔は週刊で、今よりだいぶ高い頻度で出ていました。当初は「東京大学」、6号から「東京大学弘報委員会」、25号から「東京大学広報委員会」、1398号からは「東京大学広報室」が発行元となっています。裏表紙のコラム「淡青評論」は301号から開始。現在の判型（A4）になったのは983号からでした。1200号以降はお祝い企画が姿を消していましたが、今回はせめてもの記念に100号ごとの表紙を以下に並べました。1600号は果たして…!?

1971.1.22／加藤一郎総長が特別記事を寄稿。さらに新聞記者4人を招いた座談会「外からみた東大」も掲載。

1973.6.1／林健太郎総長が特別記事を寄稿。4人の元広報委員長が記念原稿を執筆。東大教員の属性調査企画も。

1975.10.20／林総長が巻頭挨拶。百年事業紹介、7教授座談会など百周年特集。「淡青評論」を翌号から掲載。

1978.3.31／向坊隆総長が巻頭挨拶。卒論テーマ変遷、部活動、駒場祭など、学生生活に焦点を絞った特集号。

1980.11.1／向坊総長が巻頭挨拶。「学内広報」の12年を振り返る特集号。表紙は訪問客に贈答する記念品。

1983.5.10／平野龍一総長が巻頭挨拶。特集は「東京大学の国際化」。表紙は新インターナショナル・ロッジ。

1985.12.10／森亘総長が巻頭挨拶。特集は「東京大学の教育・研究を考える」。座談会は「教養学部を考える」。

1988.10.6／森総長が巻頭挨拶。 全56頁の特集は「東京大学と社会の接点」。表紙は東大牧場と検見川運動場。

1991.10.7／有馬朗人総長が巻頭挨拶。「本学における国際交流」が特集。表紙は創設期の外国人教師の銅像集。

1994.10.24／吉川弘之総長が巻頭挨拶。特集は「開かれた大学」。特殊技能を持つ技術系職員にも注目している。

1997.6.9／1100号記念企画は特になし。総長挨拶もなし。総頁数も16頁と通常モード。表紙は先端研の十周年。

2000.11.13／1200号記念企画はなし。総長挨拶もなし。表紙は宇宙線研究所の柏移転記念シンポジウム。

2004.11.10／1300号記念企画も総長挨拶もなし。表紙は総長賞授与式で受賞の学生に賞状を渡す佐々木毅総長。

2010.6.22／1400号記念企画も総長挨拶もなし（編集後記があるが言及なし）。表紙と特集はPCのリユース。

淡青評論

七徳堂鬼瓦

新聞とニュース

私が学部生だった1980年代末から90年代初頭、東京大学の先生方は「新聞くらい読みなさい」と教壇の上からおっしゃることがあった。当時、ニュースを得る方法は、新聞を読むか、テレビを見るかであった。不思議なことに、先生方から「テレビのニュースを見なさい」といわれた覚えはない。社会科学系の先生方は映像や音声の情報よりも、活字によって情報を伝達する新聞を重んじたのであろう。私の下宿にテレビはなかったが、新聞は宅配してもらっていた。

私が学部2年生の秋にベルリンの壁が崩れ、学部3年生の冬には湾岸戦争が起きた。学部4年生の秋には比較政治（ソ連政治）の講義を受けているさなか、ソ連そのものが解体した。大きな歴史の転換は、全て報道で知ることになった。テレビの方が情報伝達の速度は速いが、テレビ・ニュースは固定された時間にしか視聴できなかったので、時間を気にせず手に取れる新聞の意義は大きかったと思う。

私は今でも自宅に新聞を宅配してもらっているが、今日では、教員が学生に「新聞くらい読みなさい」ということは、少なくなったのではないだろうか。パソコンやスマホの電源を入れると、何時でも簡単にニュースに接することができる。新聞記事もウェブ上で簡単に読めるようになった。大ざっぱに何が起きているかを知るだけであれば、ポータルサイトのニュース一覧を眺めるだけで十分であろう。

その一方、大量の情報を取得することが簡単になるほど、情報源を選別・評価する能力が重要になって来た。かつては、印刷された紙という制約のために報道内容の責任の所在は明確であったが、現在のインターネット環境は、利用者にとって、ニュースの内容に誰が責任を持つのか分かりにくくなっている。情報伝達が容易になっても、悪貨（フェイク・ニュース）が良貨（事実）を駆逐しては意味がない。「新聞くらい読みなさい」というのに比べると回りくどいが、学生に対して「ニュースの情報源くらい確かめなさい」と言わなければならない時代になったのであろう。

前田幸男
（情報学環）

東京大学広報室
no.1500 2017年9月25日

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課 TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp
www.u-tokyo.ac.jp